

中等
女子音樂教科書

教師用



榮橋吉共編
內藤俊二

大阪開成館版



古戦場

犬童球溪

【大意】

一 風に靡いてゐる薄は旗のやうに思はれる。通りすぎる風はときの聲のやうに思はれる。君よ知るか、この邊は今馬道が鳴いてゐるが古戦場なのだ。昔が偲ばれるなあ。

二

屍が山の如く積重つて、血潮は川の如くに流れたのだ。その悲惨なる昔のことを此處の石碑に書いてある。石碑の下に集つて鳴いてゐる響虫の聲が何となく寂しい。

【語釋】

すだく
虫が集つて鳴くこと。

一、招く薄旗と見て

過ぐる風哄ときく

君よ知るかこのあたり

今も鳴ける馬道に

昔偲ぶ古戦場。」

二、屍山と積まれては

血潮川と流れつ、

昔語る石碑の

下にすだく響虫

聞けばそぞろ聲さびし。」

神苑

宇都野 研

【大意】

一 神宮外苑運動場には秋の日が照つてゐる。暗いところがすつかり照らし出されてゐる。今しも運動場では陸上競技か野球かで若人どもが天地を揺がさんばかりに雄叫びを上げてゐる。さて神宮の代々木の柱には明治大帝の御靈が皇國の鎮護として鎮座ましましておいで遊ばす。その常磐木を裝うて木の間には紅葉が赤い。秋の日はこにも照り足つてゐる。あゝ此の一日、心地よき日は暮れてほしくない。それにつけても大帝の御聖徳が偲ばれる。

二

神宮外苑をもお護りになつてゐる神様、明治大帝の御靈は皇國の鎮護であらせられる。國民齊しく大帝を景仰し奉れよ。(以下(一)に同じ)。

【語釋】

雄たけび
男らしき叫び聲。

二、神宮外苑護らす神は
皇國の鎮めぞ國民仰げ
天地とどろに響動す雄たけび
代代木の柱にしづもる御靈
皇國の鎮め
常磐木装へる木の間のみみぢ葉
照り足るひと日暮れずもあれよ
聖帝偲ぶ聖帝偲ぶ。」

古 戦 場

古
戦
場

Allegro. Fr. Silcher.

1. マ ネ ク ス ス キ ハ タ ト ミ ラ ス グ ル ア ラ シ ト
2. か ば ね や ま こ つ ま れ て は ち し ほ か は ど な

キ ト キ ク キ ミ ヨ シ ル カ コ ノ ア タ リ イ
が れ つ つ む か し か た る い し ー ブ み の も

マ モ ナ ケ ル ウ マ オ ヒ ニ ム カ シ シ ノ ブ コ セ チ ヤ ウ
と に す だ ー く く つ わ む し き け ば そ ぞ ろ こ る さ び し

七八 (生徒用六八・六九)

玄
海
灘

玄 海 灘

川
路
柳
虹

一、波風荒しよ玄海灘に
黒潮うづ巻き氷雨もしぶき
星かげ見えず闇雲とざしぬ
かかる夜出でゆく勇まし船人
櫓の音そろへて大波のり越え
はてなき闇へとひとり進む。」

二、荒潮高鳴る玄海灘に
藻屑と消えにし人もありなむ
猛くも襲ひし蒙古の大軍
一夜の嵐に底へと沈みぬ
國威を揚げにし筑紫の勇士
勇まし話もいまは昔。」

【大意】

一、こゝは玄海灘だ。波風が荒い。黒潮が渦を巻いてゐる。氷雨がしぶいてゐる。空は黒雲が覆うてゐて星影一つ見えない。かかる嵐の夜に沖に出て行く船人の姿は勇ましいではないか。櫓の音をそろへて波を乗り越えて、此の果しも知らぬ闇の海へ進んで行く。

二、こゝは玄海灘だ。荒潮が高鳴つてゐる。この荒海の藻屑と消えて行つた人もあるであらう。さう、昔蒙古の大軍が猛烈して来た時一夜の嵐に船は覆つて、皆海底へ沈んだのだつた。あの時は國威を揚げたなあ、筑紫の勇士どもは。あの勇ましい話も今は昔となつた。

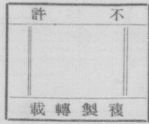
【語釋】

氷雨 霰又霰
（こぼしぬ）
こぼしぬは雲が空一面覆ひかくしてゐる……

七九 (生徒用七一)

K231J

昭和八年六月廿五日印刷
昭和八年七月一日發行



發賣所

中等女子音樂教科書教師用卷之四
定價金壹圓五拾錢

編纂者 內藤 俊二

印刷者兼
者 三木 佐助

發行所
會社名 大阪、開成館
振替口座大阪七九番

大阪市東區北久寶寺町心齋橋筋角

三木 樂器店

振替口座大阪七九番

東京市日本橋區吳服橋二丁目五

林平 書店

振替口座東京三七一番